

パワーと言語変異 女性管理職のパワー方略を中心に

高野 照司

要旨：

会話参加者間の権力格差が言語運用に与える影響は計り知れない。母語話者として我々は直観的にこの事実を知覚し、日々の社会实践として言語による権力交渉を行っている。本稿は、言語運用における権力性の定義やその顕在化に関する微視的社会言語学的研究をもとに、流動性・交渉性・方略性・暗示性などの諸特性を含めた「権力」の今日的解釈を提示する。具体的事例として、日本人女性管理職による職場での指示・命令行為を分析する。言語運用上、丁寧で婉曲的であるべきとされる社会文化的規範と現実の職責から求められる権力的物言いととの狭間でジレンマを感じている女性管理職は、言語運用とそのコンテキストとのダイナミックな相互作用を通して権力を交渉し、効率的に発話意図を実現させている様子が明らかとなった。

キーワード：

権力、言語変異、命令表現、女性管理職、コンテキスト

1. はじめに

本稿は、パワーと言語変異の相関について、これまでに微視的社会言語学(以下、同義で「社会言語学」と称する)研究から得られた知見をもとに概説する。¹ 言語変異のメカニズムを理解するためには、音・形態・語彙・統語・意味・談話といった言語の構造的側面のみならず、言語をとりまく社会的環境をも含めた多角的視野が必要である。後者の社会的環境とは、地域・社会階層・年齢・人種・性別などに代表される話者属性、さらには、発話場面・発話内容・会話参加者間関係などといった相互行為的要因を含んだ多岐にわたる内容である(Preston 1989)。本稿のテーマである「パワー」(「他者への影響力や支配」)は、明らかにこの社会的環境に属する変数ではあるが、その厳密な定義は研究者間で必ずしも一様ではなく、1960年代初頭から30年以上にわたる社会言語学の進歩とともに、言語変異とパワーへのアプローチは複雑な進化を遂げてきた。

本稿でははじめに、社会的変数としてのパワーが、過去の社会言語学研究

においてどのように捉えられてきたのかについて、その歴史の変遷を概観しながら、パワーの今日的解釈を試みる。その際に、社会的変数パワーを常に問題視してきた言語と性差研究の成果を中心に、言語変異とパワーの相関を具体的に考察することにする。本稿の後半では、日本社会に目を転じ、特に職場で管理的な地位に就く女性たちが直面する言語とパワーの問題に焦点を当てる。職場での自然発生的談話を分析資料として、女性管理職のことばの変異から読み取ることのできるパワーの顕在化プロセスを明らかにしていく。

2. パワーへの「静的」アプローチと言語変異

言語変異を理解するにあたって、その変数(または起因)としてのパワーを、話者の属性として「静的に」捉える解釈が可能である。本節では、話者属性としてのパワーと言語変異との相関について、いくつかの古典的研究を中心に概説する。

言語変異とパワーの相関を論じる上で出発点ともいうべき研究は、Brown & Gilman (1960)による代名詞使用の変異研究である。彼らは、フランス語・ドイツ語・イタリア語・スペイン語における呼称選択の変異事象に着目し、社会文化的に適切な呼称の選択は、どの言語においても、発話者とその受け手が所有する社会的パワーの整合・不整合によって、規則的に支配されていることを明らかにした。その古典的解釈では、普通形(ラテン語のtuに由来するT形)の呼称は、パワーを持つ話し手から持たない聞き手へと用いられ、敬意形(ラテン語のvosに由来するV形)の呼称は、パワーを持たない話し手から持つ聞き手へと用いられる。さらには、社会的パワーが会話参加者間で同等とみなされる場合、二次的変数である会話参加者間の「連帯意識」が機能し、それが強い場合には互いに普通形が用いられ、弱い場合には敬意形が用いられる。

同様のメカニズムは、ことばの丁寧さにおける変異事象にもあてはまる。Brown & Levinson (1978: 74-84, 242-255)によると、会話参加者間の相対的パワーは、ことばの丁寧さの種類やレベルを選択する際に、主要な社会的変数となりうる。物的支配と無形支配を個人が所有するパワーの源とした上で、会話参加者間の相対的パワーの認識は、発話が潜在的に持つ面子侵害の深刻さを測る尺度として不可欠なものであるとする。例えば、参加者Aのパワーが圧倒的に参加者Bのそれを上回るような不均衡の言語交渉においては、参加者Bは参加者Aへの面子侵害の度合いを軽減する方略として消極的丁寧さに訴え、参加者Aは同様の方略を講ずることなく、露骨な物言いに打って出

ることが多い。それとは対照的に、会話参与者間の相対的パワーに大きな較差のない均衡のとれた言語交渉においては、参与者間の「社会的距離」が方略選択の尺度となる。社会的距離のある関係においては、面子侵害を回避するための消極的丁寧さが互恵的に採用され、逆に、社会的距離のない親密な関係においては、互いに相手の積極的面子を尊重する丁寧さの方略が選択される傾向があるとしている。

計量社会言語学においても、「パワー」は公に認知された威信として、言語変異のメカニズムを理解する上で重要な社会的変数である。言語運用に関する価値判断を共有する言語共同体には、その成員誰もが認める独自の威信形が存在する。威信形は通常、当該言語共同体において、支配層が保有する社会的権力の象徴として機能する。日常的でインフォーマルなスタイルから、語形態への注意の度合いが増すフォーマルなスタイルへと場面・状況が変化するにつれ、言語運用は威信志向の変異を示すようになる。程度の差はあれ、言語運用におけるこうした威信志向性は、普通、言語共同体全般に見られる傾向ではあるが、下層階級よりも準上層階級、男性よりも女性というように、ある特定の社会集団のスタイル変異において、特に過剰に観察されることが報告されている (Labov 1972)。パワーと相関を持つ言語変異のこうした特殊性は、多くの言語共同体で観察されるもので、話者が自分の所属する社会集団の権威不足に対して、威信形の使用でその不足を補填しようという無意識的 (場合によっては意識的) 態度の現われであるとされる (Labov 1966, 1972; Trudgill 1972)。

社会的パワーを話者の属性として捉え、言語変異との相関を論ずるスタンスは、言語の性差研究においても例外ではない。Lakoff (1975) は、「不確定さ」を表す言語特徴 (意味の空虚な形容詞、平叙文における疑問イントネーション、自信のなさを示す垣根表現、付加疑問など) や敬意表現は、女性特有の話しことばに多く観察され、その原因は家父長的社会における女性の従属的地位にあるとした。

その後、Lakoff (1975) を発端として、言語の性差を社会的権力や支配との相関で説明するパラダイムが展開された。「支配アプローチ」と称されるこのパラダイムにおいて、言語運用上の男女差は、男女間の社会的権力の不平等を反映したものとして解釈される。このパラダイムに基づいて、実際の異性間会話における様々な会話行動が分析された。その結果、相手の発話への割り込みや無反応は男性の会話行動に多く観察され、会話を促進する対話者支援型のあいづちは、圧倒的に女性によって行われることが明らかとなった

(Zimmerman & West 1975; West & Zimmerman 1983)。また、夫婦間においても、妻は会話トピックを提供するなどの相互行為の促進作業に尽力することが多いが、夫はそういった努力を怠るばかりか、妻によって提供されたトピックを無視することが多い。結果的に妻によって提示されたトピックは、会話に取り上げられることが夫ほど頻繁ではない不平等も明らかとなった (Fishman 1978)。会話行動におけるこのような性差は、社会全般にわたる男性支配・優位が日常的な男女間の相互行為に如実に現われ、その主従関係は言語運用を通して日々強化されていると解釈された。

日本語における性差と社会的権力を扱った草分けの研究として、寿岳 (1979) が挙げられる。上掲 Lakoff (1975) による批判と同様に、日本女性に求められる「女らしい」物言いは、「足枷」として女性解放や社会進出を阻むものであるとしている。即ち、女性の柔らかく丁寧な物言いは、性別に関わりなく、競合的で率直な意思伝達行動が要求される「市場」には不適合とされ、男性的な物言いをする女性への社会的汚辱も日本社会では深刻である。結果的にこうした要因が、女性の社会進出を妨げ、女性の従属的地位を固定化させてきた。

一方これらの「支配アプローチ」とは対照的に、女性特有の言語変異とパワーの関係について、日本文化特有の解釈を試みる研究も見られる。Smith (1992) による予備調査では、指導的地位にある働く女性の指示表現の変異が分析された。調査の結果、女性管理職は男性管理職にありがちな威圧的物言いを単純に借用するのではなく、日本女性の伝統的な役割から派生するパワーを方略的に用いながら指示表現を運用していることが報告されている。

以上概説してきたパワーの静的解釈は、1980年代以降の社会言語学において活発となるパラダイム変化の潮流のなかで、徐々に問題視されるようになる。以下では、その変化をまとめながら、言語とパワーの今日的解釈へと考察を進めていく。

3. パワーへの「動的」アプローチと言語変異

1980年代以降の社会言語学は、言語運用とその「コンテキスト (脈絡)」との密接な関係に分析の焦点を据える理論的展開を見せていく。² そうしたパラダイム変化のなかで、言語運用はその使用コンテキストにより規定されるとするスタンス、言語運用とその意味は会話参与者間で共有される前提や背景知識といった、社会文化的コンテキストから生成されるとするスタンス、さらには、言語運用自体がむしろ能動的に当該コンテキストの性質を決定す

る機能を果たすとするスタンスなど、言語とコンテキストとの関わりについては様々な解釈が提示されてきた (Giles & Wiemann 1987)。また、それとともに開花したディスコースへの科学的アプローチにより、社会言語学は、規範主義に陥りがちな内省による言語研究から脱却し、日常の相互行為を分析資料として、言語変異のありのままの姿を直視する方向性へと進化を遂げる。

こうした理論的展開のなかで、実際の相互行為に観察される言語変異とパワーの相関に関する研究は、自ずとその使用コンテキストの緻密かつ科学的な分析作業を必須要件とし、それまで以上に言語とコンテキストとの「ダイナミックな」相互作用に着眼したアプローチをとっていくことになる。その結果、言語運用における変数パワーを、比較的安定した「静的」話者属性として捉えてきた従来の解釈は終焉を迎え、言語とパワーの「動的」解釈へと発展していく。前節で概観したパワーの静的解釈に基づいた研究成果も、言語運用コンテキストを軽視しているとして、しばしば批判的となっていく。

例えば、上述 Lakoff (1975) により提唱された女性の“powerless”とされる言語特徴が、80年代以降は、実際の言語交渉を分析資料として、その使用コンテキストとの関連で語用論的に再検証された。検証の結果、それらの言語特徴は短絡的に話者の性別と結びつけられるべきものではなく、その使用コンテキストのなかで特殊な語用論的役割を果たしていること、また、相互行為の目的や会話参加者の社会的役割などによって影響されうるものであることが判明した (Crosby & Nyquist 1977; O' Barr & Atkins 1980; Holmes 1986; Cameron et al. 1988)。また、女性の言語運用が常に公の威信 (つまり、標準規範) に対し男性よりも敏感に反応するとする「社会言語学的ジェンダーパターン」(Fasold 1990: 92) は、計量社会言語学研究で広く採用されているインタビュー方式に内在するバイアス、即ち、特殊な言語運用コンテキストから派生した人為的産物である可能性が指摘されるなどした (Cameron 1985)。

言語変異の研究において、このような会話参与形態や参加者間の社会心理をコンテキストの変数として、それらの言語運用への影響力を扱う観点には、Bell (1984) により概念化されたオーディエンス・デザインや一連の発話応化理論 (Giles & Powesland 1975; Giles & Coupland 1991) に代表されるものである。特に後者の流れを汲む Thakerar et al. (1982) は、社会的地位が異なる話者 (異なる役職の看護婦) の相互行為における発話応化現象を研究し、話者属性としてのパワーが実際の相互行為においては極めて「流動的」であり、複雑に言語変異と絡み合っている様を記述した。上級看護婦はパワフルで威圧的な言語特徴を維持することで権力を誇示し、下級看護婦は無力でひ弱な言語特徴

を用いざるを得ないという分岐的応化は、一般的な予想に反して観察されなかった。むしろ現実の相互行為においては、互いが意思伝達上の確実性を求めるが故に、両者ともに相手集団のステレオタイプの言語特徴へと過度な歩み寄りを見せるという「心理的収束を伴う言語的分岐的応化」が観察された。

社会的地位の異なる話者間で生じるこのようなパワーの「流動性」は、実際の談話的プロセスに着目した研究においても立証されている。現実の相互行為において高い社会的地位にある話者は、一貫して威圧的とされる言語特徴を活用することで常時パワーを誇示するわけではない。³ 米国中西部の教会組織における会議を分析した Pearson (1988, 1989) は、周囲から尊敬を集め有能と認められるリーダーほど、むしろ柔軟で精妙な言語運用のレパートリーを所有しており、威圧的で力強い言語運用と部下の運用スタイルへの応化を併用することで、巧みにパワーの「交渉」を行っている様を明らかにした。最も高い社会的地位にある話者 (牧師) の雄弁さは、地位の低い対話者 (会員組織の会長や会員) への深刻な面子侵害を正当化したり、付加的な丁寧さのオブラートでそれを包むなど、社会的権威を増幅させる上で有効であった。そして、それと併用される積極的の面子への働きかけ (スタイルの収束調整・ユーモアの使用など) は、社会的地位の低い会話参加者との社会的・心的距離を縮め、協調への協力や支援を引き出すための有効な手段となりえた。このような消極的の面子と積極的の面子の両方を活用するパワーの交渉プロセスは、他言語・文化においても同様に実証されている (Pan 1995; Diamond 1996 参照)。

進行中の相互行為において誰がパワーを獲得するかは、常に交渉のプロセスを経て決定され、当該やりとりの瞬間毎に相互認定に向け会話参加者間で交渉されるべきものである。このような交渉プロセスにおけるパワーの獲得は、従来“powerful”とされてきた言語特徴を採用するか否かに単純に依存しているのではなく、話者が様々な言語的リソース (例えば、語彙選択、スタイル調整、丁寧表現など) を総動員して、会話参加者間で共有される社会心理的要因 (心的距離、帰属意識など)、つまりコンテキストの中味を「方略的に」規定する言語運用に長けているか否かによる (Owsley & Myers-Scotton 1984; Ochs 1992)。

母語話者により“powerful”と認められる話者の「方略的」言語運用を、コンテキストとの関わりで詳細に分析した研究に Myers-Scotton (1985) がある。彼女は米国マスメディアで著名な司会者のインタビューにおける収束・分岐的スタイル変換と特定ニュアンス語彙の選択を分析した。“powerful”な司会

者ほど、コンテキストに照らして有標的または無標的な言語運用を使い分け、対話者との人間関係（連帯意識，社会的地位，スタンス）を方略的に調整しながら複合的な「顔」（“multiple identifies”）を構築するという。そのような変幻自在性が，話者意図の不確かさや曖昧さを対話者に感じさせ，当該相互行為を仕切る余地をより多く司会者側に与える結果になるとする。

一般に，話者意図の伝達という観点から，言語運用コンテキストに関する前提や背景知識が，当該会話参与者間でより多く共有されているほど，発語内効果（illocutionary force）がその威力を発揮する。言語運用におけるパワーの行使も例外ではなく，語彙や形態・統語構造面で見かけ上は“powerless”な発話（例えば，敬意表現，ほかし表現，婉曲的言い回しなど）だが，その使用コンテキストとの緊密な連携で，「暗黙の」パワーを極めて効率的に生成する場合がある（Weizman 1989）。

このように発話そのものの明示的な意味（locutionary meaning）よりも，会話参与者間関係を土台にした，暗黙の発話意図を拠り所とするパワーへのアプローチは，人間関係において調和や協調的信頼関係の構築をより重んじる女性に特徴的だとする研究がある（Tannen 1990; Jones et al. 1995）。職場で管理的な立場にいる女性の談話を分析したTroemel-Ploetzの一連の研究（1992, 1994）によると，女性上司に典型的なパワーへのアプローチは，部下との職階差・権力差をできるだけ排除あるいは覆い隠し，職階に関係なく権力と権利を平等に分配することによって，部下の自発的な協力や支援を得ようとする間接的なものであった。また，堅苦しくなく，ユーモアにあふれ，部下一人一人に気配りをする女性管理職の姿勢は，さもないれば張り詰めた雰囲気職場を和ませ，作業効率を一層高める上でも効果的とされている。

以上のような研究成果から，言語変異における変数パワーの「動的」解釈は，以下（1）～（4）として要約できる。

1) パワーの流動性

現実の言語交渉において，社会的地位の高い者が，恒常的にその権力を振りかざして相互行為に参加するわけではない。パワーの行使は，その成功が常に確約されているわけではなく，他者からの思わぬ抵抗や権力交替も起こりえる極めて流動的な社会实践として捉えられるべきである（Ng & Bradac 1993）。パワーを行使する会話参与者は，言語運用を通して，パワーの出所となる自己の社会的地位や役割を確認・維持する作業を継続的に行っている（Fowler 1985）。

2) パワーの交渉性

現実の言語交渉において，流動的実体としてのパワーは，会話参与者間で常に交渉の対象となる。パワーは会話参与者間で幾重にも共有されている関係性の反映であり，パワーの行使は他参与者により批准され受け入れられるための談話的プロセスを経る（Kramarae et al. 1984; Diamond 1996）。

3) パワーの方略性

現実の言語交渉において，固定化していない流動的なパワーを交渉し獲得する手立てとして，会話参与者は巧みな方略を講じなければならない（Gumperz 1982; Habermas 1984）。パワーの行使を意図する話者は，言語レベルを巧みに調整することにより，他会話参与者との連帯意識や力関係，ひいては当該相互行為の「コンテキスト」自体の社会文化的意味を規定する。即ち，方略的言語運用が能動的にその使用コンテキストの性質を決定する働きかけを行い，その規定されたコンテキスト内で会話参与者は，社会文化的に適切な社会实践を期待され，一種の既成事実としてパワーの配分が達成される（Duranti 1992）。

4) パワーの暗示性

言語運用におけるパワーの生成は，常に言語コード上で明示的に行われるわけではない。一般に“powerless”とされる語彙や形態・統語構造の使用という観点から，見かけは“powerless”とされる発話も，当該相互行為のコンテキストとの相互作用や会話参与者間で共有される前提や背景知識から生成されるパワーを獲得できる。人間社会における権力の本質が，ある特定場面に端を発するもの，ある特定組織に付随するもの，マクロな社会構造そのものから派生するものなど多層的であるため（Fairclough 2001: 58），ある相互行為においてパワーが行使された場合，そのパワーの性質や起源もまた錯綜している。

これらの諸特性を踏まえ，次節では日本語の変異事象における変数パワーに目を転じ，筆者自身の研究（Takano 1997, to appear）から，特に女性管理職の指示行為に見られるパワーの顕在化プロセスを具体的に検証する。

4. 女性管理職の言語運用におけるジレンマとパワー交渉ストラテジー

1986年に施行された男女雇用機会均等法以来，職場で管理的な職責を担う女性の数は年々着実に増加しているが（鹿嶋 1993；井上・江原 1996），性差別的待遇や男性中心主義のイデオロギーは職場に根強く残っている（竹信 1994）。そのような状況のなかで多くの女性管理職が，特に男性管理職や男性

部下とのコミュニケーション上の不利を指摘しており(鹿嶋 1993), 筆者が1994年に行った実地調査(Takano 1997)でも, 女性管理職は職場でのことば使いに格段の注意を払っている実態が明らかとなった。管理的な立場で働く女性たちは, 社会・文化的に日本女性に対し期待される婉曲的で丁寧なことば使いと(真下 1969), 職責から求められる力強く支配的なことば使いとの狭間で, 何らかのジレンマを感じている(Reynolds 1990)。

そこで筆者の研究(Takano 1997, to appear)では, 女性管理職がこのようなジレンマをいかに解消しているのかを中心課題に, 職場での自然談話に観察される指示表現の方略的使用を分析した。部下を指図し動かす際に, 女性管理職はパワーを言語運用上どのように顕在化させていくのであろうか。女性管理職が働く九つの職場で, 日常の自然な相互行為を観察し, 合計630個の指示表現を採集した。⁴

分析の第一歩として, 明示的なパワー要素の有無, 即ち, 指示表現自体の形態・統語構造を「直接性↔間接性」の尺度で分析した(Blum-Kulka et al. 1989: 18)。分析の結果, 女性管理職の職場での言語運用には, 伝統的規範文法に則った女性想起的言語特徴(例えば, 終助詞「かしら」「のよ」等)や規範を逸脱した男性想起的言語特徴(例えば, 終助詞「ぜ」「ぞ」等)などはほとんど用いられておらず, あからさまな性想起的言語特徴に関しては「中性化」または「脱女性化」の傾向が観察された(cf. Reynolds 1990; Smith 1992)。⁵

最も注目すべき傾向として, 男性管理職とは対照的に, 女性管理職は形態・統語構造的に「丁寧」で「間接的」な指示表現を一貫して選択している(cf., 井出・井上, 1992)。女性管理職によって用いられる表現の主なものは, 頻度順に,

- 1) 「・・・してください」(23% [145/630])
- 2) 「・・・して(ね/よ)」(8.3% [52/630])
- 3) 「お願いします/いたします」(5.2% [33/630])
- 4) 「・・・は/して, いい/よろしい/かまわない/結構です」(4.9% [31/630])
- 5) 「・・・してもらえます?/もらえます?/もらえませんか/いただけますか」(4.4% [28/630])

などで, 男性管理職が頻繁に用いるものとして,

- 1) 「・・・しろ」(15.6% [19/122])
- 2) 「・・・してください」(10.7% [13/122])
- 3) 「・・・して(ね/よ)」(7.4% [9/122])

- 4) 「・・・しないとだめ/いかん」(6.6% [8/122])
- 5) 「・・・は/して, いい/よろしい/かまわない/結構です」(6.6% [8/122])

などに比べ, 直接さの度合いとその頻度において女性の使用の方が丁寧であることが分る(Takano 1997: 265-91)。

また, 女性管理職の間接的な言い回しとして, 指示表現における「視点」(request perspective)の選択に関して一定の傾向が観察された(Brown & Levinson 1987: 190-206; Blum-Kulka 1989)。男性管理職による指示行為においては, その視点が受け手に向けられる表現が圧倒的であった(83.3%; cf. 女性管理職45.9%)。⁶ それとは対照的に, 女性管理職の指示行為においては, むしろ指示者側に視点が置かれる表現(30.9%; cf. 男性管理職3.3%)や,⁷ 指示者や受け手を明示しない表現(10.7%; cf. 男性管理職1.7%)など,⁸ 指示内容の遂行を応諾するか否かについての選択余地を受け手に与える間接的表現の頻度が高かった(Takano 1997: 280-8)。⁹

また, Takano (1997, to appear)では, 先行研究(Smith 1992; Sunaoshi 1994, 1995)により日本女性の伝統的権威から派生するとされる女性管理職特有の方略についても再検証を行った。しかし, 「母親語ストラテジー」については全体の8.7% (55/630)程度の頻度でしか観察されず,¹⁰ 「受身パワーストラテジー」に関しても全体の3.3% (21/630)程度の低頻度であった。¹¹ さらには, 男性管理職もこれらの文形式をほぼ同程度に用いており(母親語: 9.8% [12/122], 受身パワー: 3.3% [4/122]), これらが女性管理職特有のジレンマ攻略ストラテジーと考えるには難があるという結論を下した。

これを受け, さらにコンテキストをより重視した再分析を行った結果, これらの指示表現形式の使用は, むしろ性差という変数によってではなく, 使用コンテキストの場面的特性によって説明されることが判明した(Takano 1997: 291-302)。様々な場面的特性と当該表現形式との相関について, 統計学的分析を行った結果,¹² 話者属性としての性別に関わりなく, 「母親語ストラテジー」は, 直接的部下などの「内」成員に用いられ($p < .05$) (Wetzel 1994), 指示をする管理職よりも年下か同年代の部下に対し用いられることが判明した。さらには, 男性管理職は女性管理職に比べ, 当該文形式を「外」成員にも頻繁に用いることが分った($p < .001$)。一方, 「受身パワーストラテジー」については, 使用頻度が低く統計学的分析は行えなかったが, 「会議」などのフォーマルな場面における指示行為に特有のレジスターとして, 再解釈が可能であると思われる(会議: 68% [17/25]; オフィス: 28% [7/25]; 電話: 4%

[1/25]).

上記の観察をまとめると、部下を指示するという対時的行為においても、女性管理職は男性的な形態・統語構造を「パワーコード」としてただ単純に転用するわけではなく、むしろ社会文化的な規範に則って、明示的には(文構造上は)「丁寧」で「婉曲的」な発話形式を一貫して採用しているわけである。しかし前節で考察したように、特定の言語特徴と話者パワーを静的に関連づける解釈では、一般的には“powerless”と見なされるこれらの発話形式を用いながらも、女性管理職がいかにパワーを行使しているのかについて真の解答は得られない。そこで以下では、指示表現の形態・統語構造だけではなく、その使用コンテキストにも着目し、女性管理職の指示行為におけるダイナミックなパワー交渉プロセスの解明を試みる。

4.1. 脈絡化 (contextualization)

自然談話における指示表現に関する過去の研究のほとんどは、指示行為の「核」と呼ばれる発話部の形態・統語的構造を主な分析対象としてきたが、Takano (1997, to appear) では分析のスコープを拡大し、行為の核とその環境で観察される共起ルールにも目を向ける方法をとった (Ervin-Tripp 1976: 32).¹³ そうすることで、計量的分析を排除することなく、現実の相互行為をよりダイナミックに捉えることが可能となり、指示行為において話者が講じる方略的側面や会話参与者間で繰り広げられるパワーの交渉プロセスがより記述しやすくなると考えた。

部下を指図する際に女性管理職が用いる特有の方略として、指示核の前後にその「支援的働きかけ」を男性管理職に比べ極めて頻繁に用いることが挙げられる (女性管理職 44.9% [283/630]; 男性管理職 18.9% [23/122]; $p < .001$)。以下 (1), (2) の例のように、支援的働きかけは、比較的威圧的な指示行為や対話者の消極的面子が著しく侵害される指示内容に関して、その指示の根拠や言い訳を付け加えるなど、消極的面子救済の緩和策として用いられるのが一般的である。

- (1) 指示核に対する「負担軽減」機能として:
「もう明らかに省くと分ってるものは結構なんですが、二人で判断しないでください」(下線部は指示核)
- (2) 指示核に対する「弁解」機能として:
「悪いけど、電気のスイッチ押してくれる?」(下線部は指示核)

しかし、以下 (3), (4) の例に見られるように、特に女性管理職の場合は、積極的面子志向の意味合いで支援的働きかけを活用し、前後に起こる指示行為の核を「脈絡化」する傾向にあることが判明した。¹⁴

- (3) 指示核に対する「動機提示」機能として:
「これ、私も自信ないからね、よく見て」(下線部は指示核)
- (4) 指示核に対する「準備要請」機能として:
「これ、あるでしょ? 補充しておいて」(下線部は指示核)

こうした方略により話者の意図はより明確となり、形態・統語構造上はそれほど直接的・威圧的ではない指示核も増強されることが可能となる。

さらに、女性管理職に特徴的なこの「脈絡化」の方略は、消極的面子救済の緩和策を本来は必要としないはずの、最も婉曲的な暗示的指示行為(ヒント)との共起においても明らかである。¹⁵

- (5) 女性会館館長 (40歳代) (F9) が60歳代の男性部下 (M1) へ、倉庫の換気扇スイッチを切るよう指示する¹⁶:
→ F9: 換気扇をねえ、日中はかけておきたいと思うんです。
M1: xxx [xxx]
→ F9: [なかにある] んです。で、出かける時にすいませんが、
M1: はい、わかり [ました。]
F9: [あの、スイッチを.]

ここでF9は、支援的働きかけを活用し、以前はオフにしていた倉庫の換気扇のスイッチを今後勤務中はオンにしておくという状況説明をする。部下は退勤時にオフにする必要性が生じたことを悟り、指示核が明示的に表現されなくとも、部下は自発的に話者意図を汲み取った旨の返答をする(「はい、わかりました」)。指示行為の核自体は明示的に表現されていないものの、支援的働きかけ(矢印部)を活用することで話者の意図は脈絡化され、談話イベントの自然な軌道のなかで、部下は話者の意図を自発的に汲み取り、指示行為が達成されるしくみになっている。

以上のように、女性管理職は支援的働きかけを方略的に利用し、指示行為自体の補強に役立てていることが分った。ここで注目すべきことは、異なる

タイプの丁寧さの混用である。社会文化的に期待される「丁寧」で「婉曲的」な言語運用を表向きは固守しながらも、一方では積極的面子志向の方略を用いながら、指示意図の明確な伝達と実践を確実なものとするための談話的交渉を行っているのである。

4.2. 連帯・協調へのアプローチ

女性管理職による積極的面子志向の指示方略は、職場内の連帯感や協調的関係を助長するためにも活用される。男性管理職とは対照的に、職階ヒエラルキーから派生するパワーに訴えるのではなく、平等主義的な人間関係のなかで士気を盛り上げ、任務の効率的遂行へと部下集団をまとめていく「協働的パワー」を女性管理職はその使用コンテキストから引き出す(Sunaoshi 1994)。このようなパワー交渉方略は、指示核と共起する「注意喚起表現」の特徴的使用や指示意図の「フレーム化」において観察される。¹⁷

指示行為における注意喚起表現は、対話者の注意をひくという意志伝達上の目的の他に、会話参与者とその使用コンテキストについての様々な社会的情報(例えば、年齢差、地位格差、親しさ、場の堅苦しさ、物理的状況、等)や情意的メッセージを伝えるという重要な対人交渉的役割を果たす(Ervin-Tripp 1976)。注意喚起表現の使用頻度については、男性管理職と女性管理職の間でほとんど差は見られなかったが、¹⁸それが果たす機能面においては女性管理職特有の分別を行っていることが分った。

特に「呼びかけ」機能において、男性管理職は極めて高圧的な二人称代名詞(「おまえ」)を用いることが多く(79% [15/19])、その使い分けにおいて、部下の社会的背景(例えば、直属部下か否か、性別など)を考慮に入れている規則性は見うけられない。それとは対照的に女性管理職は、「姓+さん」(68.9% [31/45])、「名+ちゃん・さん」(13.3% [6/45])、肩書き(例えば、係長)(11.1% [5/45])など多岐にわたる選択肢の中から、個々のアイデンティティを尊重し、部下との社会的・心的距離に適合した運用が認められる。このように対話者一人一人のアイデンティティに対応した言語変異は女性に特徴的とされるが(Brown 1980; Tannen 1990)、女性管理職も例外ではなく、権力で指示意図に従わせるというよりは、職場の連帯や協調に重きを置き、共益へ向けて部下の自発的遂行を促す上で効果的である。

一方、視点を変えれば、このように協調的関係・連帯意識を重んじる集団においては、話者意図が敢えて言語コードによって明示的に伝達されなくとも、ほとんど誤解なく相手のニーズ・要請に応えられるほど、成員間での相

互理解は保たれているはずである(Kirsh 1983; Ervin-Tripp 1976)。以下(6)で示すように、その証とも言える女性管理職によるヒント方略の積極的かつ斬新な活用は、職員間のこうした共感的関係を基盤としてはじめて可能となる。

- (6) 近日に迫る催し物の執行部会議において、女性理事(F5)が数名の部下に指示をだす。指示意図は、部長(その部下たちの直属の上司)に当日会場の監督をしてもらうよう依頼させることであった：

F5: 出来るだけ中に入って、直接にやっていくように、
→ あの= お願いして、

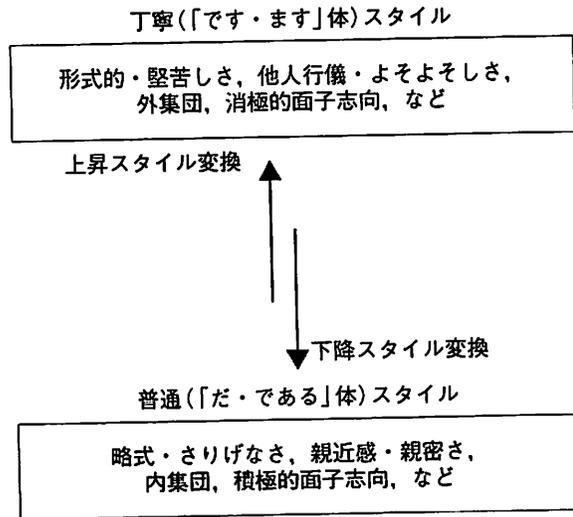
ここでは、本来は比較的直接的な指示文形態(「・・・して」形)が非完結(コマ)イントネーションで発話されている(矢印部)。ヒント方略のなかでもこの「独白スタイル」による指示意図の表明は、女性管理職に固有のものである。¹⁹実質的な指示行為を「独白」とすることで、指示の発信者とその受け手という境界は曖昧化し、女性管理職(F5)はリーダーではなく、この重要処理事項を提案する協働集団の一員に過ぎなくなる。このように「フレーム化」された指示表現は、当該集団全員が取り組むべき課題として共有され、共益のために自発的に行動を起こそうという内集団の結束を強める効果を発揮する。このように相互行為の表舞台には現れず、第三者からは見えづらい「潜在的」パワーを方略的に活用できる背景には、管理職としての権威や部下との相互的信頼関係がしっかりと根付いた組織的結束が不可欠であり、女性管理職はむしろこうした側面の構築に、パワー交渉上の力点を置いているようである。

4.3. パワー方略としての丁寧さ

本節では、指示行為における女性管理職の意図とその受け手である部下の意志との間に明らかな葛藤が生じていると思われる場面に焦点を当て、女性管理職がどのようにパワーを顕在化させ、その対峙的狀況を円く治めるのかというパワーへの交渉プロセスを詳細に検討していくことにする。その際に、女性管理職によって発せられた指示行為とそれを取り巻く発話スタイルの変換に目を向け、見かけ上は“powerless”な丁寧表現が、パワー獲得交渉の中核としてダイナミックに機能している様を記述する。

特に日本語の文末スタイルに着目すると、以下のように二種類のスタイルと各スタイルがコンテキストから投影しうる「象徴的意味」の分類が可能であ

る (Gumperz 1982).



男性管理職による指示行為の場合、直接的で威圧的な普通体が一貫して用いられているのとは対照的に、面子侵害の度合いが深刻な指示行為場面に直面した女性管理職は、上記二スタイル間での変換を極めて頻繁に行っていることが判明した。²⁰ 各女性管理職ごとに無標的スタイルは異なるが、それを有標的スタイルに変換したときに、それに付随する象徴的意味がコンテキストから喚起され、何らかの言語外的効果もたらされるのである。

以下(7)ではその例証として、ある語学学校のインストラクター会議から一場面を検討する。統括責任者(F8)が計14人の部下(インストラクター)を前に、以前に幾度か問題となっている教具の未整頓が未だに改善されていない現状を指摘し、一層の注意を促す場面である。会議というフォーマルな場面設定から、F8の発話のほとんどは会議開始時から丁寧体で統一されていたが(無標的スタイル)、この局面になって会議の雰囲気緊張感を増し、スタイル変換が頻繁に行われるようになる。

(7) (指示核は下線で、上昇スタイル変換は↑で、下降スタイル変換は↓で示す)

- 1 F8: x x x の教材です^が=
 2 ↓ ……また^メチャクチャで。((強い感情をこめて))

- 3 ……なんであんななっちゃうのかしらって思うんですけど。
 4 ……^ねえ。
 5 ……たぶん悪いのは<@ あたしじゃないかって思うんですけど、
 6 行きたんびに荒らしてるって気がなくもないすがね@>
 7 特に^ね=、あの x x x のカードがごっちゃごちゃ。
 8 それから=x x も x x も二箱ずつ用意されていますでしょ/
 9 その両方の箱がメチャクチャね。
 10 ……一応、色つけてるじゃない。
 11 ↑ 秋の分からはまたきれいに揃うとは おもいます^が=
 12 ……七月使うときにも、もうくれぐれもお気をつけ下さい。
 ((嘆れ声で))
 13 ↓ x x さんがそうでないと… x x コースの死神みたいになっ
 ちゃうねえ、やってもやっても。
 14 ……だからあの=、是非みなさん。
 15 もとあったところへ戻すっていうのちょっとこころがけて=、
 16 ↑ お忙しいとは思んですけどね、くれぐれもお願いします。
 17 ↓ ……で、一番困ったのはね=、
 18 リスニングタスクのあの=オリジナルがなくなっちゃってる。
 19 だからあの、オリジナルはもう何が^あっても、
 20 ↑ 戻してくださいね。
 21 ↓ ……オリジナルないとほら、コピーできないでしょ/
 22 あれがないとやっぱりすごく困っちゃうので。

行2で管理職F8は、それまで無標的スタイルとして用いていた丁寧体を普通体(有標的スタイル)に切り替え(下降スタイル変換)、感情のこもった発話で問題(教材の未整頓)の深刻さに対する部下たちの共感を得ようとする。有標的な普通体への切り替えにより、それまで前面に出ていた統括者としての形式的スタンスは消え失せ、それに代わって、同じ内集団の一員としてのアイデンティティーが前景化される。行3以降に見られる縮約形、くだけた語彙の使用、部下の同意を求める強意終助詞(「^ねえ」)、冗談混じりの自己問責(行5, 6)は、²¹ 部下の面子侵害の度合いや場の緊張感を和らげるだけで

なく、管理職も含めた「我々全員」が共有する問題として、その解決へ向けて部下の協調と前向きな態度を増進させようという談話的方略として機能している。

これら「脈絡化」の手続きにより、この時点でF8の意図は部下たちにとって明白なものとなっている。F8はまず、それまでの普通体から無標的な丁寧体へとスタイルの上昇変換を行い(行11)、行12の指示核では極めて丁寧かつ婉曲的言い回しで指示行為を終える(「お気をつけ下さい」)。同時にF8は、有標的な談話上の工夫として、ゆっくりとした口調、助詞への韻律的強調(「おもいます」が)やポーズ、囁れ声による脚色などにより部下の注意を引き付け、当該問題を早急に解消する重要性や深刻さをアピールしている。

しかし、このように、指示行為の核心部分において、文体上は“powerless”と思われる丁寧体を取って用いる言語運用は、いかなる方略的動機に基づくものなのであろうか。会議場面には有標的な普通体を用いながら、内集団・仲間的アイデンティティーを誇示してきた管理職F8が、無標的な丁寧体へと発話スタイルを変換することで、逆に本来の職責や統括者としてのアイデンティティーが呼び戻され、部下との地位・権力上の格差を再浮上させるのに役立っているのではないかと解釈できる(cf. 井出・井上1992)。普通体から丁寧体への切り替えは、職場での「会議」という場の正当性・合法性を再確認させ、当該指示行為自体の権威・パワーを増幅させる機能を果たす。つまり使用コンテキストとの連携により、丁寧体の採用はその発話内効果を減ずるところか、場の特性から逆にその拘束力を増強させることになる。

以前に何度も同じ問題が指摘されていたという経緯から、F8は上記と同様の談話的パワー交渉を、行13以降繰り返し行っている。再び普通体への変換やユーモア、縮約形を使用して(行13)、内集団のスタンスから部下の理解・共感を得るといった積極的面子志向の方略を講じ、強調機能表現(「是非」)、注意喚起表現(「みなさん」)、負担軽減表現(「お忙しいとは思うんですけどね」)の後、行16では指示核を丁寧体で言い終える(「お願いします」)。さらに同様のパワー交渉が、行17以降においても行われている。縮約形(「なくなっちゃってる」)を含めた普通体へスタイル変換し、当該問題から自分も被害を被っている旨を伝えることで、内集団の成員としての自己アイデンティティーを強調し、部下の共感に訴える。その後、行19～20では強調機能表現(「・何が^あっても」)を伴って、指示核が丁寧体で発話され(「戻してくださいね」)、当該指示行為は組織的権威・拘束力を獲得する。²²

以上のように、女性管理職はスタイル変換、くだけた語彙・言い回し、そしてユーモアといった幅広い言語運用レパートリーを駆使し、様々なアイデンティティーを通して、部下集団との相対的スタンスや力の配分を自在に操っている。ここで注目すべきは、女性管理職の指示行為に特徴的とされる丁寧で婉曲的な文形態が、その使用コンテキストとの連携によって象徴的意味を喚起し、パワー方略の主軸として活用されていることである。上述したように、このような「丁寧さ」を武器としたパワー方略を解明するには、単独文の形態・統語構造のみをコンテキストから切り離して分析する従来の静的アプローチでは不十分である。指示行為自体の共起要素や談話レベルでの方略的展開に分析の視野を広げ、相互行為のなかで繰り広げられる交渉プロセスをダイナミックに捉える必要がある。

さらには、言語運用における性差研究が、一般的にその分析の焦点を、消極的面子志向の丁寧さばかりに向けられてきたこともまた問題である(Hori et al. 1999)。積極的面子志向の丁寧さは、対時的な相互行為に直面した女性管理職にとって同等に重要なパワー方略として機能していることが、以上の分析から明らかとなった。

5. おわりに

本稿では、微視的社会言語学の理論的変遷とその研究成果をまとめながら、言語変異と変数パワーの相関に関する今日的解釈の概説を試みた。そこで明らかになったことは、言語運用コンテキストの果たす役割の重要性と、それを分析視野に組み込むことの生産性である。パワーの所在を文レベルの構造的特徴にのみ求める従来のアプローチの非生産性を指摘した上で、言語運用はその使用コンテキストから規定されると同時に、コンテキスト自体を規定するという、言語のダイナミックな特性が浮き彫りになった。女性管理職は、社会文化的規範としての丁寧で婉曲的な物言いを守りながらも、時にそれを方略としてコンテキストの性質を規定し、そこからパワーを生成していた。流動的かつ多面的変数としてのパワーに関する真の理解は、言語とコンテキストの密接な相互作用・連携への洞察を抜きには得られないことが分る。

さらに、ことばの「丁寧さ」の運用システムに関して、現実をより反映した知見が得られたように思う。指示行為のような対時的言語交渉において、話者は消極的丁寧さのみならず積極的丁寧さも同等に駆使し、効率的な意図伝達とその実現を可能にしている。ことばの丁寧さに関するこうした言語運用の現実には、異言語・異文化を超えた普遍的能力の反映でもある。ある意味ス

テレタイプ化した消極的面子偏重の日本文化においても例外ではなく、話者は同一発話イベントのなかに両種類の丁寧さを同時進行的・複合的に活用して、パワーの獲得・実践に役立てている様子が明らかとなった。以上の意味において、日本人の言語交渉における積極的面子志向の言語運用研究も、今後活発に行われていくべきであろう。

注

1. 社会における言語や言語パラエティー間の不平等、支配構造、そしてそれに纏わる社会問題を扱う巨視的社会言語学(または、言語社会学)において、言語の権力性は恒常的な研究課題であるが、本稿では、言語運用に現れるパワー、言い換えれば、進行中の相互行為において、話者または発話自体が投射する権力性を問題にすることから、微視的社会言語学を理論的基盤とする。
2. 「コンテクスト」が包含する意味内容は幅広い。本稿で意図する「コンテクスト」は、議論の都合上、「言語脈絡」(“language as context”)のみならず、「相互行為場面」(“setting”)や社会文化的背景としての「状況外的脈絡」(“extrasituational context”)をも含めた包括的概念として捉えておくことにする(Goodwin & Duranti 1992:6-9)。
3. 例えば、話す量や速度、話者交代、遮断行為、敬語・付加疑問・強意表現・垣根表現・ポーズなどの使用といった言語特徴に着目して、話者パワーの有無が論じられてきた。
4. 対照群(control group)として、4名の男性管理職(会社社長2名、管理職2名)が用いた122個の指示表現も分析した。分析資料は、外食産業やサクセスストーリーを扱った3本のドキュメンタリー番組から収集された。
5. 性想起の終助詞は、会話参与者間の心的距離が近い場合や比較のカジュアルな場面で使用されるのが一般的であることから(McGloin 1990)、女性管理職による中性的終助詞の圧倒的使用は、以下で述べる丁寧で改まった文末形式の汎用と密接に関わっているとみる解釈も可能である。しかし、普通体(「だ・である」体)をとる発話においても、性想起タイプの終助詞はほとんど用いられていない。
6. 例えば、指示文「ちょっと待って」は「待つ」という行為の遂行者となる受け手に視点がおかれるため、より威圧的である。
7. 例えば、「じゃあ、また12月に(来てくれるよう)お願いします」は「お願い」をする指示発信者(話者)に視点がおかれるため、より緩和的である。
8. 例えば、「練習をたくさんすることが必要だと思います」などがこれにあたる。
9. これらの男女間差異は統計学的に有意である(p<.001)。
10. 当該談話資料では、「・・・しなさい」「・・・してちょうだい」「・・・してごらん」がこれに該当した。
11. 当該談話資料では、「・・・すること/ように」、「・・・してもらう/いただく」、「・・・してもらいたい/いただきたい」がこれに該当した。
12. GoldVarb (Rand & Sankoff 1990)を用いた。分析に含めた変項は、1)話者の性別、2)相互行為の起こっている場所(オフィス、会議、電話での会話)、3)指示によって求めら

れる行為の緊急度、4)相互行為の男女構成(同性一対一、異性一対一、同性集団・異性集団会話)、5)「内」(直属部下)・「外」(非直属部下)、6)会話参与者間の年齢差、である。

13. 多数の自然言語の分析から開発されたBlum-Kulka et al. (1989:275-6)の分割法に基づいて、指示表現を以下のように区分した。“John, get me a beer, please. I’m terribly thirsty.”(「ジョン(さん)、ビールをとってください。すごくのどが渇いているんです。)」という指示行為において、“get me a beer”を核(Head)とし、“John”は注意喚起部(Alertter)、“please”は緩和語(Downgrader)、“I’m terribly thirsty”を指示核の支援的働きかけ(Supportive Move)とした。
14. 積極的面子志向の「支援的働きかけ」の使用は、男性管理職が16.5% (14/85)で、女性管理職が29% (132/455)であった(.10>p>.05)。
15. この男女差は統計学的に有意であった(男性管理職10.8% [4/37]；女性管理職51.4% [90/175]；p<.01)。
16. 談話の文字起こしにおける主なシンボル：[] (重複)；xx(聞き取り不可能または実名部分)；=(音延長)；・・・(ポーズ)；/ (上昇ピッチ)；<@ @> (笑い混じり)；^x(音節強調)；あいうえお(スローテンポ)；((筆者の観察コメント))。
17. 注意喚起表現の解説については、注13を参照されたい。
18. 注意喚起表現の使用頻度：女性管理職 25.6% (161/630)、男性管理職 26.5% (32/121)。
19. 暗示的指示行為における「独白スタイル」の頻度差は、女性管理職が21.7% (38/175ヒント)、男性管理職が2.7% (1/37ヒント)で、統計学的に有意であった(p<.001)。
20. 本談話資料において、男性管理職によるスタイル変換が観察されたのは、支援的働きかけにおける二度の事例のみである。会社社長M1が、特定個人への指示から部下全体への指示へと切り替えたときに、普通体から丁寧体へのスタイル変換が観察された。
21. 男性想起の述部表現(「・・・なくもないすがね」)の有標的使用もここではユーモアとして効果的である。
22. 部下の共感へのアピールは、さらに21行以降も続けられる。

謝辞：本稿執筆にあたり、片岡邦好氏より多くの有益なコメントを頂いた。改めて感謝を申し上げます。

参考文献

- Bell, A. 1984 Language style as audience design. *Language in Society*, 13, 145-204.
- Blum-Kulka, S., House, J., & Kasper, G. (Eds.) 1989 *Cross-Cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex.
- Blum-Kulka, S. 1989 Playing it safe: The role of conventionality in indirectness. In Blum-Kulka et al., (Eds.), *Cross-cultural pragmatics: Requests and apologies*. Norwood, NJ: Ablex. pp. 37-70.

- Brown, P. 1980 How and why women are more polite: Some evidence from a Mayan community. In S. McConnell-Ginet, R. Borker, & N. Furman, (Eds.), *Women and Language and Literature and Society*. New York: Praeger. pp. 111-149.
- Brown, P., & Levinson, S. C. 1978 *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, R., & Gilman, A. 1960 The pronouns of power and solidarity. In T. A. Sebeok, (Ed.), *Style in Language*. Cambridge, MA: MIT Press. pp. 253-277.
- Cameron, D. 1985 *Feminism and Linguistic Theory*. London: Macmillan.
- Cameron, D., McAlinden, F., & O'Leary, K. 1988 Lakoff in context: the social and linguistic functions of tag questions. In J. Coates, & D. Cameron, (Eds.), *Women in Their Speech Communities*. London: Longman. pp. 74-93.
- Crosby, F., & Nyquist, L. 1977 The female register: An empirical study of Lakoff's hypothesis. *Language in Society*, 6 (3), 313-322.
- Diamond, J. 1996 *Status and Power in Verbal Interaction*. Philadelphia: John Benjamins.
- Duranti, A. 1992 Language in context and language as context: the Samoan respect vocabulary. In A. Duranti, & C. Goodwin, (Eds.), *Rethinking Context*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 77-99.
- Ervin-Tripp, S. 1976 Is Sybil there? The structure of some American English directives. *Language in Society*, 5, 25-66.
- Fairclough, N. 2001 *Language and Power* (Second Edition). Harlow, Essex: Pearson Education Limited.
- Fasold, R. 1990 *The Sociolinguistics of Language*. Cambridge, MA: Basil Blackwell.
- Fishman, P. 1978 Interaction: the work women do. *Social Problems*, 25 (4), 397-406.
- Fowler, R. 1985 Power. In T. A. van Dijk, (Ed.), *Handbook of Discourse Analysis*. New York: Academic Press. pp. 61-82.
- Giles, H. 1973 Accent mobility: A model and some data. *Anthropological Linguistics*, 15, 87-105.
- Giles, H., & Coupland, N. 1991 *Language: Contexts and Consequences*. Buckingham: Open University Press.
- Giles, H., & Powesland, P. F. 1975 *Speech Style and Social Evaluation*. London: Academic Press.
- Giles, H., & Wiemann, J. M. 1987 Language, social comparison, and power. In C. R. Berger, & S. H. Chaffee, (Eds.), *Handbook of Communication Science*. Newbury Park, CA: Sage. pp. 350-384.
- Goodwin, C., & Duranti, A. 1992 Rethinking context: an introduction. In A. Duranti, & C. Goodwin, (Eds.), *Rethinking Context*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 1-42.
- Gumperz, J. 1982 *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Habermas, J. 1984 *Theory of Communicative Action*, Vol. 1. London: Heinemann.
- Holmes, J. 1986 Functions of *you know* in women's and men's speech. *Language in Society*, 15, 1-22.
- Hori, M., Tsuda, S., Murata, Y., Sekiyama, K., & Murata, K. 1999 *The Positive Politeness Trend in Recent Japanese*. Symposium 1400, AILA 1999 at Waseda University.
- 井出祥子・井上美弥子 1992 「女性ことばにみるアイデンティティー～会社女性の場合～」『月刊言語』, 21 (10), 46-47
- 井上輝子・江原由美子(編) 1996 『女性のデータブック』(第二版) 有斐閣
- Jones, E. S., Gallois, C., Callan, V. J., & Barker, M. 1995 Language and power in an academic context: The effects of status, ethnicity, and sex. *Journal of Language and Social Psychology*, 14 (4), 434-461.
- 寿岳章子 1979 『日本語と女』 岩波書店
- 鹿嶋敬 1993 『男と女: 変わる力学』 岩波書店
- Kirsh, B. 1983 The use of directives as indication of status among preschool children. In J. Fine, & R. O. Freedle, (Eds.), *Developmental Issues in Discourse*. Norwood, NJ: Ablex. pp. 269-290.
- Kramarae, C., Schulz, M., & O'Barr, W. M. 1984 Introduction: Toward an understanding of language and power. In Kramarae et al., (Eds.), *Language and Power*. Beverly Hills, CA: Sage. pp. 9-22.
- Labov, W. 1966 *The Social Stratification of English in New York City*. Washington, D. C.: Center for Applied Linguistics.
- Labov, W. 1972 *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia, PA: University of Pennsylvania Press.
- Lakoff, R. T. 1975 *Language and Women's Place*. New York: Harper & Row.
- 真下三郎 1969 『婦人語の研究』 東京堂出版
- McGloin, N. H. 1990 Sex differences and sentence-final particles. In S. Ide, & N. H. McGloin, (Eds.), *Aspects of Japanese Women's Language*. Tokyo: Kurosio. pp. 23-41.
- Myers-Scotton, C. 1985 What the heck, sir: Style shifting and lexical colouring as features of powerful language. In R. L. Street, Jr., & J. N. Cappella, (Eds.), *Sequence and Pattern in Communicative Behavior*. London: Edward Arnold. pp. 103-119.
- Ng, S. H., & Bradac, J. J. 1993 *Power in Language*. Newbury Park, CA: Sage.
- O'Barr, W. M., & Atkins, B. K. 1980 "Women's language" or "powerless language"? In S. McConnell-Ginet et al., (Eds.), *Women and Language in Literature and Society*. New York: Praeger.
- Ochs, E. 1992 Indexing gender. In A. Duranti, & C. Goodwin, (Eds.), *Rethinking Context*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 335-358.
- Owsley, H. H., & Myers-Scotton, C. 1984 The conversational expression of power by television interviewers. *The Journal of Social Psychology*, 123, 261-271.
- Pan, Y. 1995 Power behind linguistic behavior: Analysis of politeness phenomena in Chinese official settings. *Journal of Language and Social Psychology*, 14 (4), 462-481.
- Pearson, B. 1988 Power and politeness in conversation: Encoding of face-threatening acts at church business meetings. *Anthropological Linguistics*, 30 (1), 68-93.
- Pearson, B. 1989 "Role-ing Out Control" at church business meetings: Directing and disagreeing. *Language Sciences*, 11 (3), 289-304.
- Preston, D. R. 1989 *Sociolinguistics and Second Language Acquisition*. Oxford: Basil Blackwell.
- Rand, D., & Sankoff, D. 1990 *GoldVarb Version 2: A Variable Rule Application for the Macintosh*. Centre de recherches mathématiques. Université de Montréal.
- Reynolds, K. A. 1990 Female speakers of Japanese in transition. In S. Ide, & N. H. McGloin, (Eds.), *Aspects of Japanese Women's Language*. Tokyo: Kurosio. pp. 129-144.

- Smith, J. S. 1992 Women in charge: politeness and directives in the speech of Japanese women. *Language in Society*, 21 (1), 59-82.
- Sunaoshi, Y. 1994 Mild directives work effectively: Japanese women in command. In M. Bucholtz et al., (Eds.), *Cultural Performances: Proceedings of the Third Berkeley Women and Language Conference*. pp. 678-690.
- Sunaoshi, Y. 1995 Your boss is your "mother" : Japanese women's construction of an authoritative position in the workplace. *Texas Linguistic Forum* 34. Department of Linguistics, University of Texas at Austin. 175-188.
- Takano, S. 1997 Chapter 5: A Study of Directive Speech Acts by Working Women in Positions of Authority. *The Myth of a Homogeneous Speech Community: The Speech of Japanese Women in Non-traditional Gender Roles*. Ph. D. Dissertation, The University of Arizona. pp. 238-354.
- Takano, S. (To appear) Re-examining linguistic power: Strategic uses of directives by professional Japanese women in positions of authority and leadership. *Journal of Pragmatics*.
- 竹信三恵子 1994『日本株式会社の女たち』 朝日新聞社
- Tannen, D. 1990 *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. New York: Morrow.
- Thakerar, J. N., Giles, H., & Cheshire, J. 1982 Psychological and linguistic parameters of speech accommodation theory. In C. Fraser, & K. R. Scherer, (Eds.), *Advances in the Social Psychology of Language*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 205-255.
- Troemel-Ploetz, S. 1992 The construction of conversational equality by women. In K. Hall et al., (Eds.), *Locating Power: Proceedings of the Second Berkeley Women and Language Conference*, Vol. II. Berkeley, CA : Berkeley Women and Language Group. pp. 581-589.
- Troemel-Ploetz, S. 1994 "Let me put it this way, John": Conversational strategies of women in leadership positions. *Journal of Pragmatics*, 22, 199-209.
- Trudgill, P. 1972 Sex, covert prestige and linguistic change in the urban British English of Norwich. *Language in Society*, 1, 179-195.
- Weizman, E. 1989 Requestive hints. In S. Blum-Kulka, S. House, & G. Kasper, (Eds.), *Cross-cultural Pragmatics: Requests and Apologies*. Norwood, NJ: Ablex. pp. 71-95.
- West, C., & Zimmerman, D. 1983 Small insults: a study of interruptions in cross-sex conversations between unacquainted persons. In B. Thorne et al., (Eds.), *Language, Gender and Society*. Newbury House. pp. 102-117.
- Wetzel, P. J. 1994 A movable self: The linguistic indexing of uchi and soto. In J. M. Bachnik, & C. J. Quinn, Jr., (Eds.), *Situated Meaning: Inside and Outside in Japanese Self, Society, and Language*. Princeton, NJ: Princeton University Press. pp.73-87.
- Zimmerman, D., & West, C. 1975 Sex roles, interruptions and silences in conversation. In B. Thorne, & N. Henley, (Eds.), *Language and Sex : Difference and Dominance*. Newbury House. pp. 105-129.

第3部

ことばと公共福祉